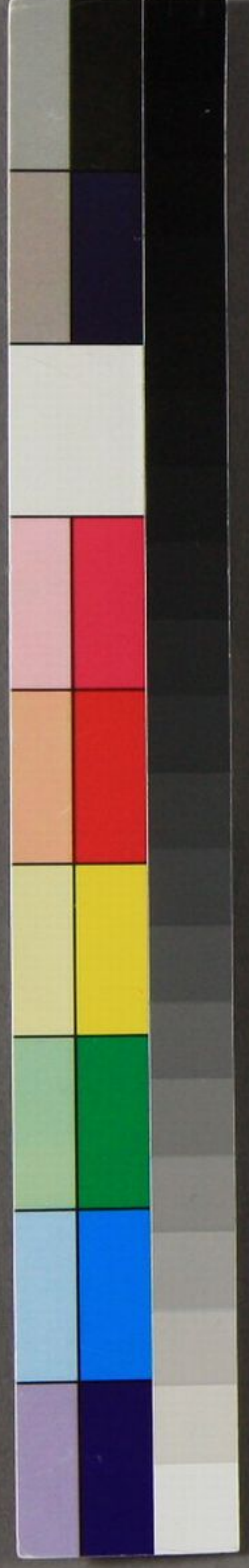


西國三十三所名所圖會七





西國三十三所名所圖會卷之六目錄

大和國

國號之譯 二上山巖窟越 二上嶽
 熊野新宮權現社 傘堂 長徳院靈牌 藤懸墓 鈎鐘 吉弘墓
 石光寺 本堂 常行堂 深之井 當麻寺 本堂 金堂 講堂 西御堂
 新曼陀羅 重新曼陀羅 與院 法華堂 鐘樓 不動堂 影向石 未迎木
 地蔵堂 阿伽井 求聞持堂 庚申堂 念佛院 阿弥陀堂 山越堂 紫雲庵 大門 藥師堂
 練供養 天満宮 當麻國見塔 大坂山口神社 天羽雷神社 孝婦伊麻舊趾
 龍峯寺 腰折田古跡 福徳寺 現徳寺 宇佐神社 當麻山口神社
 長尾神社 布施今市地蔵 爲志神社 笛吹池 角刺宮旧趾
 金村神社 火雷神社 來迎寺 鴨都波神社
 遊岡 笛吹社 袖之松 秋津嶋宮古趾 孝照天皇陵
 忍海寺 若櫻宮古趾



葛木大重神社 一言主神社 本社 櫻社 三社 宝庫 護摩壇 一言主寺

高宮廟 池心宮旧址 鏡石 辨天祠 拜殿 二之鳥居 一之鳥居 名産大和綿

茅原寺 本堂 行者堂 觀音堂 笠掛杉 香指水 護摩壇 鐘樓

孝安天皇陵 白鳥陵 彈琴原 葛城川 鷹韃山

檀原宮古趾 佐田丘 重坂川 子嶋先德 子嶋神社

高取山城 竹取 竹取翁 觀學寺 靈就鳥寺 越智家墓

高生神社 清水神祠 清水井

波多懸井神社 第六番壺坂山南法華寺 本堂 觀音堂 三層塔 鐘樓 神祠四社

奥院 法有羅漢石 曼陀羅石 比蕪寺古礎 世尊寺 六田淀 柳之渡

吉野名産鉾野 安騎野 秋野川 東野

一之坂 都藍尼像 一藏王堂 長峰藥師堂

村上義光塔 同碑 千本櫻 日本花 七曲

松山御茶屋古跡 藤尾坂

金鳥居 二王門

十休地藏堂 威徳天神社 花供懺法會式 蛙飛神事

實城院 什室 吉水院 後醍醐帝 御物 金輪寺 茶文

櫻木坊 什室 五本卒都婆鈿 金輪寺

勝手神社 古鐘 袖振山

松翁廬跡 竹林院

天皇橋 天皇櫻 梵天社 猿引坂

大橋 閨屋花 桜が嶽

金峯山寺 本堂 觀音堂 經藏 大塔古趾 四本桜 銅燈籠

吉野山 吉野川

駒天山 五臺寺

佐拋神社 御影山 村上義隆碑

如意輪寺 正行毛塚 後醍醐天皇陵

椿山寺 布引櫻

二上山巖窟越

河内大和の西国に跨る
東の方大和国葛下郡
あり

万葉

あさのつよ
かろく月の

とけいも

妹がたりと

かろく



平山

大和

大和國大管十五郡... 地勢山繞... 中平地... 南大山... 就中大

柳人皇の肇神武天皇天下小玉... 速んで神代の蹤... 日向國宮崎郡

夕此時天下草昧... 封域... 帝東征... 後めて都

大和國檀原宮... 國造... 珍彦... 居... 故大和國日本

惣號... 皇居... 宮... 給... 國... 通... 一國の名

聖武天皇天平九年... 大倭國... 改大養德國... 同十九年二月又

舊小依大倭國... 又天平勝寶年間... 改... 今... 大和國

拾芥抄... 見... 延喜開題記... 大倭國草昧... 居舎

人民唯山に據て... 是... 山... 釋日本紀... 開闢... 土地

乾... 山路... 登... 人の跡... 山... 善隣國寶記... 後漢書倭王居

耶摩堆蓋此國人到彼土... 稱大倭... 故如此書... 日本世紀... 東朝... 大倭の二

字連綿... 或本朝... 書... 異朝... 從... 或異域... 唱... 我朝後小

和... 日本... 神武... 東征... 難波... 枚方... 登

給... 伊... 越... 大和... 膽... 外... 國... 故... 山... 淀川... 北

の國... 河... 山... 外... 河... 對... 名... 又伊... 北

國... 山... 背... 書... 皆... 北... 又加茂... 視... 國... 中... 平... 方

山... 山... 門... 本... 居... 宜... 長... 國... 考... 此... 國... 四... 方... 山... 繞... 中

あま... 山... 處... 意... 處... 井... 處... 或... 山... 秀... 約

又山内... 山... 内... 意... 紀... 然... 荒... 木... 田... 久... 老... 槻... 落... 葉... 夜... 林

登... 家... 庭... 處... 畧... 轉... 斯... 言... 故... 應... 神... 天... 皇... 之... 山... 城... 國... 葛... 野... 夜... 登... 家... 庭... 處... 家... 居

か... 夜... 波... 母... 美... 由... 夜... 波... 家... 庭... 處... 家... 居

の... 多... 御... 言... 夜... 波... 家... 庭... 處... 家... 居

師... 考... 應... 神... 天... 皇... 葛... 野... 望... 大... 空... 奇... 大... 空... 奇... 大... 空... 奇

中... 青... 垣... 山... 家... 庭... 處... 望... 大... 空... 奇... 大... 空... 奇... 大... 空... 奇

あ... 思... 山... 夜... 波... 家... 庭... 處... 家... 居

熊野
権現社



平山



本社

御供所

拜殿

火舎

手水

岩屋越
東麓の
所へ出る

傘堂

西六ノ二



當麻の郷中
夜宮祭の
搦山

高雄寺

新在家村より正山口薬師堂より本尊華師如来別観世音安置の堂
宇鎮守権現の社あり

深井石光寺

深野村あり深野寺深井寺深寺あり當麻寺より四丁より北よりあり

本尊 弥勒菩薩 石佛あり

常行堂

本堂の北に並ぶ

漆の井

本堂の前より蓮糸と漆の井と云

糸懸櫻

深の井の傍にあり深野の櫻と云

當寺、往昔人王二十五代

天智天皇の御宇此地より夜と光明を放つ事あり此苗戲聞に達し初と見せしめり此の大石有て形佛像に似たり是に依て弥勒の二尊の像と作し則ち寺と建す此尊像と安置し光明に依て

石光寺

号し給其後百年の星霜経て四十七代 淡路廢帝の御宇天平寶字七年六月廿二日當麻寺に於て中將法如尼公浄土の大曼陀羅と感得

平寶字七年六月廿二日當麻寺に於て

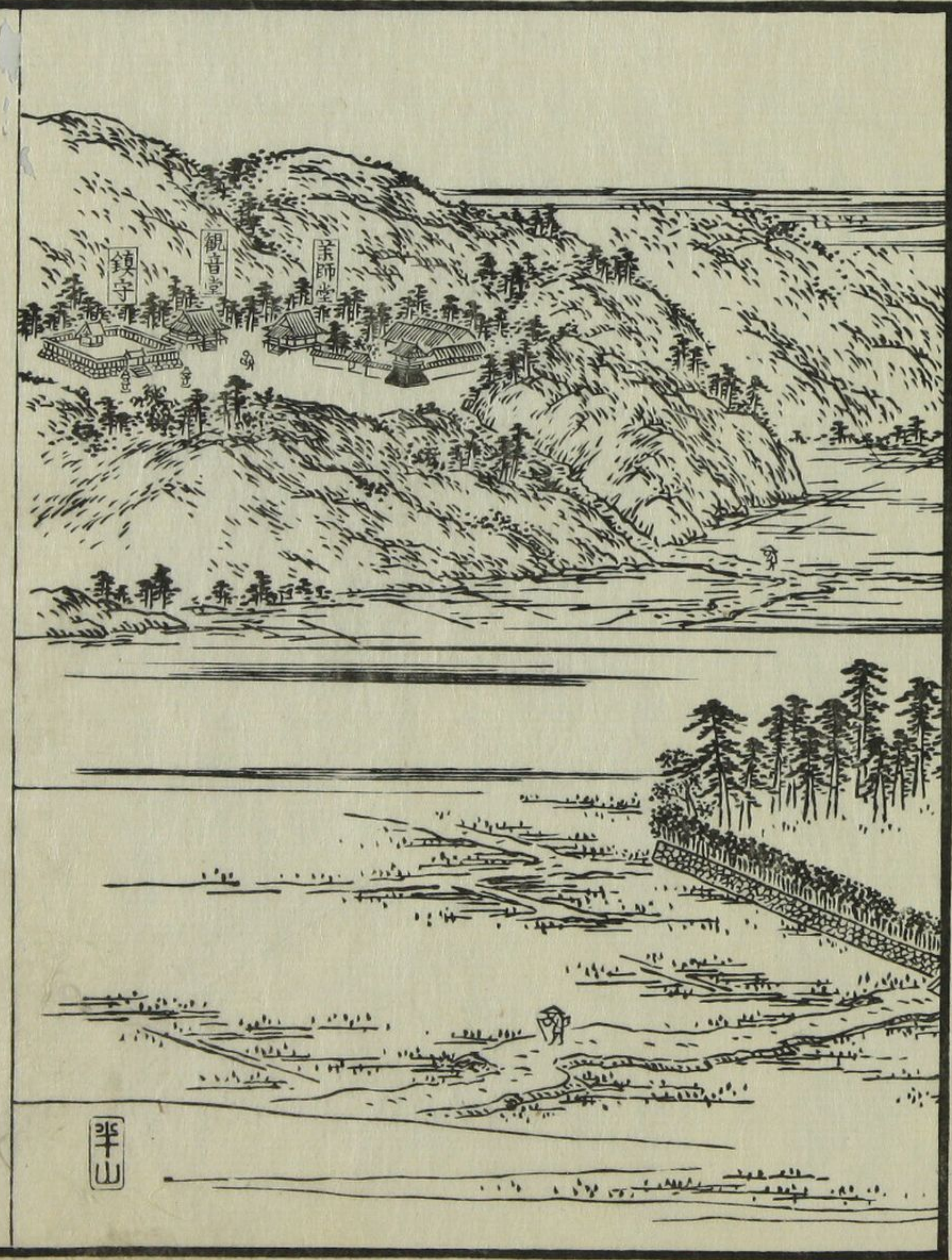
中將法如尼公浄土の大曼陀羅と感得

夕一時一人の化尼表現

此地に井と穿て蓮の糸成漆の糸に奇あり一色乃水にて五色の糸と漆あやう是よりして此井と漆の井と稱し寺成深寺ともいひ

あやう又堂前の桜樹は

往古役行者の裁りしと誓つて曰佛法の盛衰此桜の繁枯小よりるべしなり時一年に繁茂し花爛熳たり後曼陀羅成就の砌



平山

西六ノ五

石光寺
 深の井
 糸掛様
 高雄寺



蓮池

菩薩の化身深の井一糸と深此楼一糸とて下まういより糸かけ楼も言
あふせりくぞ又深野の楼も号い尚中将姫の事ハ次小悉く出い

二上山萬法蔵院禅林寺

二上嶽の東南九子山の俗當麻寺と総い 真言宗十六坊淨土宗三寺
尼寺三寺

本堂 蓮系新曼荼羅 長一丈五尺並ニ
中將姫来迎の弥勒を安い

金堂 本尊の前の傍より本尊弥勒菩薩
前一不動明王 役行者 四天王と安い

講堂 金堂の北より本尊阿弥陀佛並地藏菩薩觀世音
不動明王 尹門天と安い

西御堂 金堂の右の後明王院の内から本尊觀世音左の脇に中將姫の像と安い 此行におか
中將姫剃髮のゆかりの傍に香水あり 神鬘の御此水を用いゆと云

東塔 南の方より二層 西塔 同西の方より東塔と同ト
觀世音と安い

影向石 金堂の南 来迎松 金堂の東より古木の幹の
あり 講堂の後面より役行者と安い

一夜竹 本堂の左 行者堂 講堂の後面より役行者と安い
聖護院御宮御行所ト云

寶蔵 本堂の後より稿糸の 五社明神社 本堂の後より 天満自在天神 八幡宮
真の曼陀羅と蔵む 白山権現 一百余社神 八大龍王

法華堂 五社明神の左より本尊釈迦如来と安い 腋士普賢 文珠の西大士 熾慶十王と安い
此堂は名大将頼朝郷熊谷小次郎直家と奉行して建立しつゝ所ト云

鐘樓 法華堂の傍より 不動堂 本堂の乾より 御供所 法華堂に並ぶ
不動尊と安い

御影堂 法華堂の北より 地藏堂 御影堂の前左の傍より
私法大師と安い 六角造り 地藏尊と安い 阿伽井 地藏堂の
向より

求聞持堂 御影堂の右上方より 庚申堂 御影堂右の前より
虚空蔵菩薩と安い 青面金剛童子と安い

念佛院 南の上の方より南別所ト云 阿弥陀堂 念佛院の内西の方高き所あり
本堂に善導大師の像と安い 弥陀如来と安い 善導大師作

山越阿弥陀堂 本堂の右の傍より 腋檀に中將法如尼僧淨土經書寫の画像と安い
山越の如來と安い 自画ト云

紫雲菴 本堂良の傍より中將法如尼より住み古跡ト云 今尚尼僧んと守は
此辺尼僧の菴ニテ所よりつゞき中將尼の跡と墓ト云

和州社社記に中將姫當麻の實雅法師と師とて髮とせり 善念尼とも妙意とも又
改りて法如尼と号い紫雲庵ト云 菴と結んで念佛ト云 紫雲庵は當麻寺の東の方小堂
あり尼寺ト云 中將姫命終の所ありト云

雲玉集云中將姫二上山草庵より正身の弥陀来迎り 命終の期とせんとして念佛ト
昧入寮なる窓の前月の光より照らるる老尼一人来りて法如尼ト云 中將姫

南河内陀佛と云い 中將姫の御影と云い 中將姫

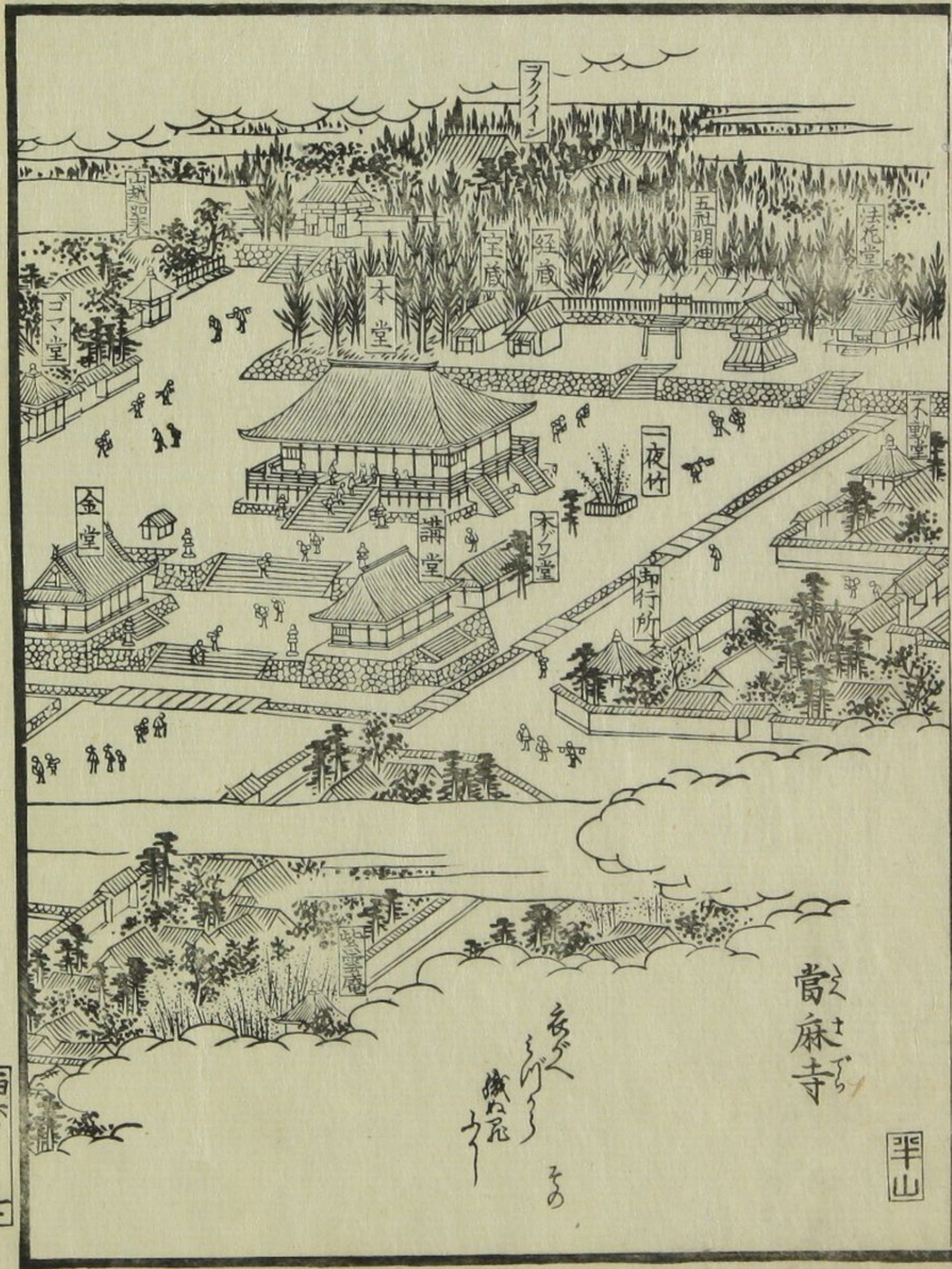
二上山 尾より

大門 本堂の正面通東に向い 藥師堂 門外の北の在 天満宮 大門の通北の傍
金剛力士の両像と安い 家中あり 在家の内より

柳當寺 用明天皇第四の皇子麻魯古親王の御建立あり 其初ハ推古天皇



治美初回安火のり
 金堂講堂も二基の塔
 鏡楼経蔵坊舎りつ
 ありとも曼陀羅堂
 巽の角火をまわ
 能く深
 西巻抄見



當麻寺

平山

西巻抄見
 ありとも

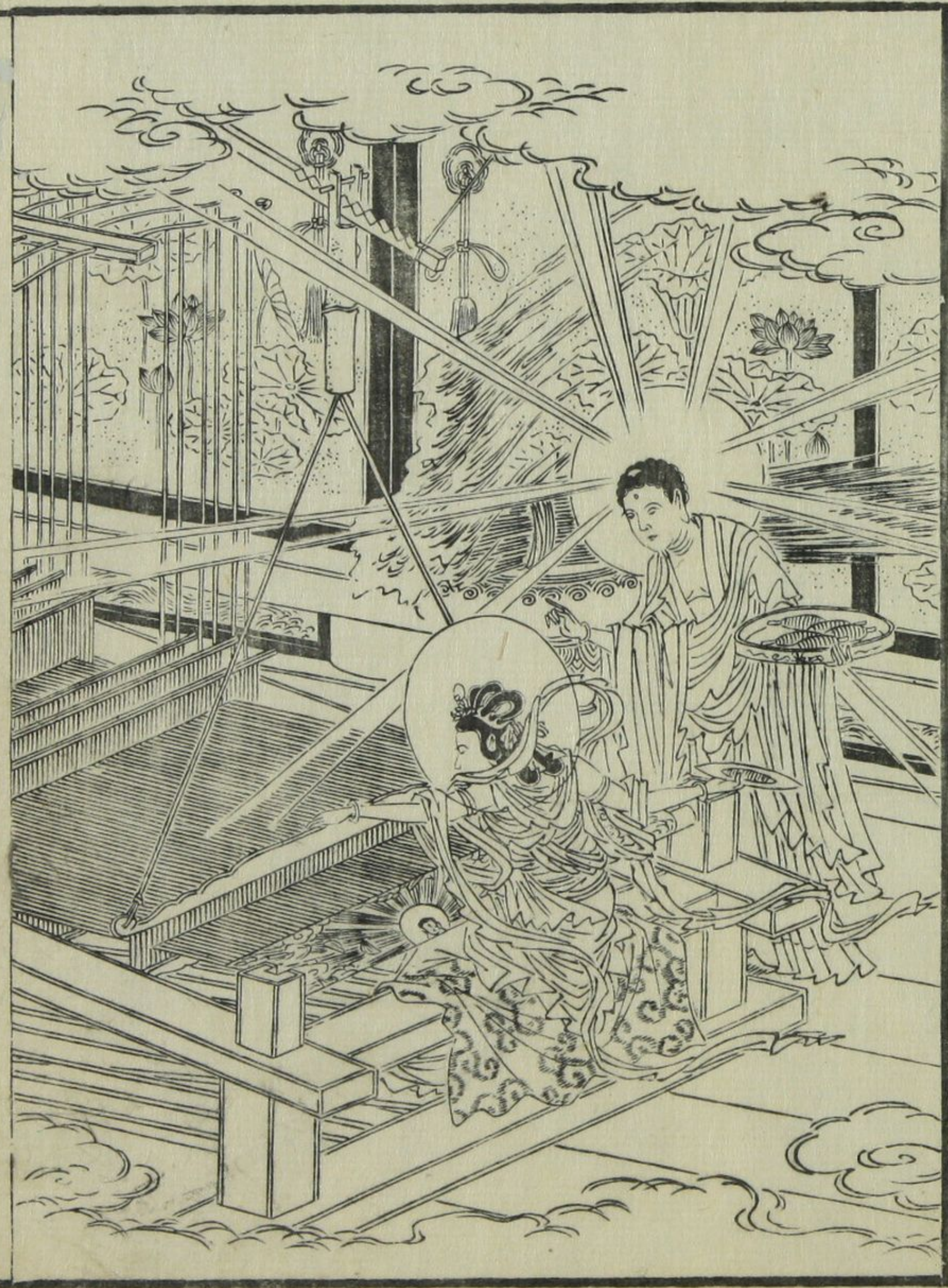
西巻抄見

二十年河内國山田郷に造立つて萬法藏院と号し今の當麻の地は舊後行
者諸神勸請の靈場なり然るに天武天皇白鳳二年麻魯古親王瑞夢を見
しより觀感ありて麻魯古親王及び刑部親王と遣はして役小角の地より
しめい河内國より此に移して伽藍改營し同十年二月堂舎悉く成就し
あに於て改めて禪林寺と号し今後麻魯古親王の孫當麻國見真人改め
當麻寺と号し其後天平寶字中少横佩右大臣豐成公の女中將姫と有
天平十九年生る幼くして穎悟書と善次天平寶字元年十一歳の時父豐
成其弟惠美押勝の爲に禪せられて左遷せしむる姫嘗て佛道と信し同七年
當麻寺に入て實雅和尚と以て師と爲りて法如の閑居に住
し念佛と昧改修し禪淨土經數百卷と書寫し平生に生身乃彌陀と
稱せん事と祈ふふ一時一人の禪尼來て曰く我汝とて淨土及び彌陀と觀む
べ須らく百駄の蓮莖と集めしむ是より中將尼此由成帝奏奉らる
より觀聞つて召し下し蓮莖と運ぶるなり其時禪尼自ら此莖と折る

絲と取新に井と穿るまきと濯ぐに五色燦然と溢まらるる數日つて一人の
化女まきと容兒端麗なり稍く禪尼に問ひつりて名を尋や答へ曰く
早成まきと斯く化女此糸と得く殿の西北の隅に於てまき織る機杼の
音軋軋と初更に始めり四更に全く織むる其幅一丈五尺藁二把と以て
油二升と浸し燭の化女織物を捧ぎて禪尼に授く禪尼中將法如尼と云ふ
淨土の衆相悉く美麗に備りし中將尼大に悦び節あさ竹と求め軸と
あは斯る長と問ひ節あさ竹のつりりも又奇異なり時化女忽然とて
見えぬ禪尼かこひて四句の偈成作る圖と礼し曰

往昔華嚴法行 佛事新起又有故 感君懇志我來此 一至是場永離苦

中將尼問て曰善知識づくり来りて又さるの婦人いりる人ぞ答て
我いそり異ある者らるん哉我則ち西方の教主あり先の女觀音大士と
と言ひつて空と凌いで西の方を去りし中將尼あまより精進修行す
く勅む翌年九月又豐成勅許りて京に歸るなり寶龜六年二月吉中將法



當麻寺の曼陀羅、弥陀
 観音の両尊織せる所
 ありし其上品
 上生中品生
 同、織と
 の銘文四百十
 二字最奇巧
 あり、実
 二国無双の
 霊宝と
 なり

平山

如尾念佛安坐一々寂以年二十九 元亨叙書

或書云中將姫極り能書して本朝女筆の其一人あり弘法大師此姫の筆法とす

又曰中將姫横佩大臣豊成郷の女として惠美押勝、豊成郷の房あり初め押勝が橋本良磨と縁せし時、兄の豊成も縁せられて筑紫橘さきゆひの中將姫、又豊成流人となり叔父押勝謀叛人あまきかき身の憚りて當麻寺に身を隠し、尾もあつりゆひ、他俗説、傳へ継母の縁入りて中將姫の母、百能と隠れあはれ、貞女なり、豊成郷去の後も禁中に住して内侍所の神職とすむ

當山坊中御剃髮行、紀云天平宝字七年癸卯六月十五日中將姫十七歳して御剃髮

新曼陀羅

當時本堂収むる所あり故に本堂と曼陀羅堂とす

此曼陀羅往昔天平寶字七年より四百五十二年の後、順徳院建保二年、勅許を蒙り同四年阿波國浦の庄にて繪と得たり同五年六月廿三日功ありぬ盡く良賀法印海慶法眼銘文、修理大夫藤原朝臣行能なり
又天平宝字七年より九百十五年と経く延寶五年古曼陀羅の靈破れ補ふ此時新曼陀羅も共々再修りしと尚次一季著し
○右新曼陀羅の年歴先大和旧趾幽考、以て大和名所圖會に寫し順徳院の御宇、建保二年、勅許を蒙り有然をも保延、崇徳院の御宇より按て建保と保延と書録あり

重新曼陀羅

大雲院高舉上人収むる所時、延寶六年戊午二月なり

此余靈佛靈寶亦許多く、枚擧さず、次依くあり畧し

兩曼陀羅再修并重新曼陀羅寄附の説話

洛陽大雲院の高舉上人、説法の大導師として世々名高く、原より浄土の奥儀と極めり、其言もさあり天台真言俱舍唯識の精と事とを搜り求め内外の群典のく、猶歩し、其後、九條の里、菴と結び、閑居のひ、時和州當麻寺の曼荼羅、年々霜に及び、もれつらう、損壞して、来世の結縁も久からず、其事を憂ひ、ついで補ひ、ついで度々延寶五年五月入ると、伴ひ當麻、つらう、ね中古源頼朝公の寄附あり、御厨子蓮糸の大曼荼羅、張あつて、四百有余の春秋と経ね、板と剥くと、往古の軸とあり、卷も、らん、文のふも、一向に叶ひ、ついで此秘が、既に止らん、世時、衰相の上、紙と、つらう、漆井の水と、沃と、つらう、草心無、つらう、祈願、つらう、一夜、黥、つらう、聲、つらう、つらう、翌朝、自然、板と、離きて、卷下、つらう、一點も、疵、つらう、つらう、板

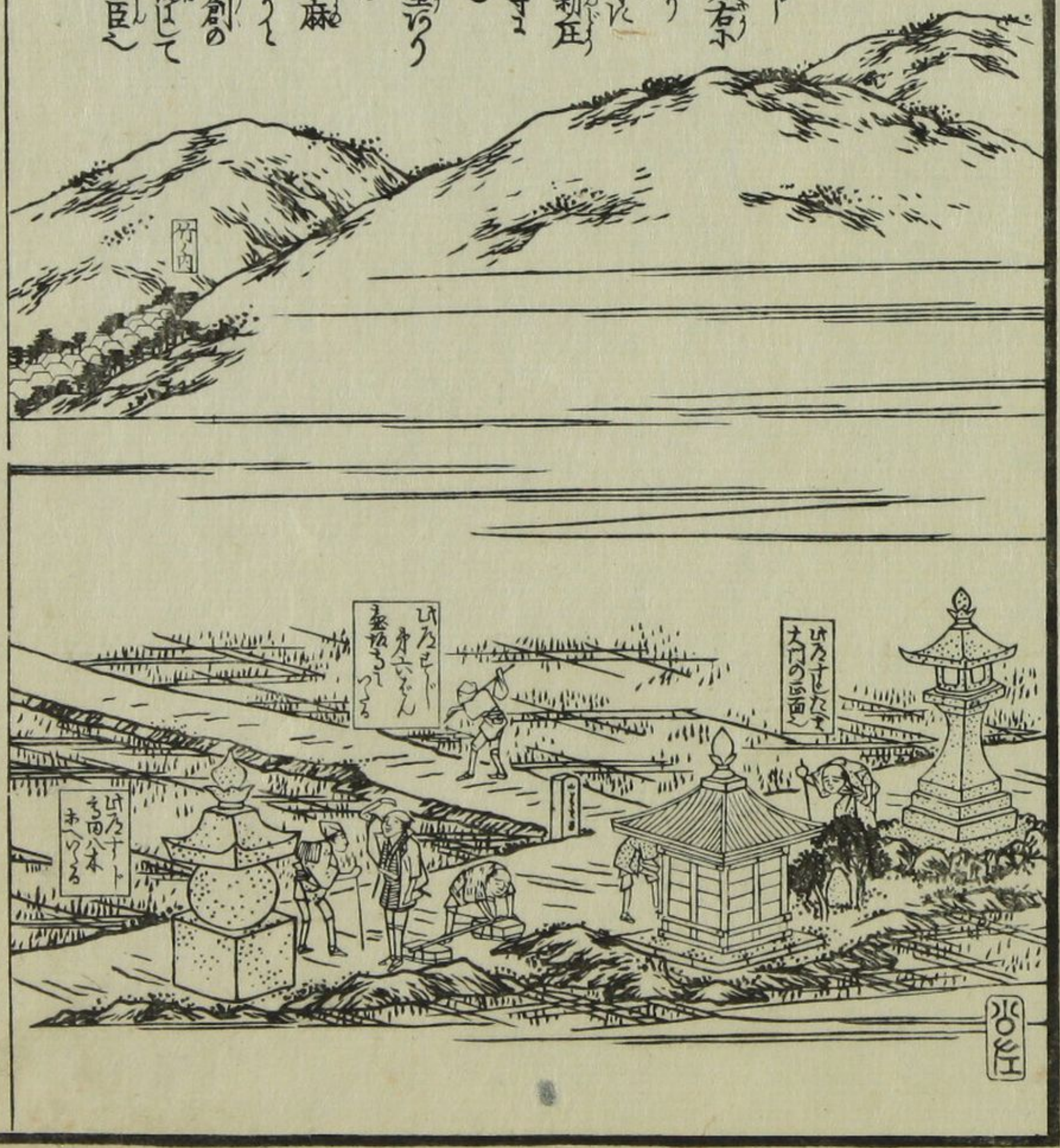
巾ひ表一張一帛一帛に本曼荼羅のてしに細く庄嚴に至るを明く不撓
 ちつれさるる善て粗増に彩具をもちて網一揃いの欽損したすし所を
 繕ひんせし何れも色は似たり是凡更にあはれと業と煩と新と
 徒弟一兩人二上を救て登りて鋤とからば一人の老夫一行りて此者
 捨てり此頃大曼荼羅修葺の事を兼りりや繪具と望めり
 しては進らば一聞ゆに兩僧大歡び此程の事と語らる憑りて
 して来りてのて一群の森と導と行めまど熊野新宮鎮坐一の御社
 ありて其後の方と掘り彩の塊と獲りせり皆くころとび禮謝と述
 んとて今すてありて有つる老夫の方へ行や終見えたり余よと
 ぞん思ひ村里の夫々の人向求むまも老人と曾て知りありこれに
 は古より熊野權現此曼荼羅と本地にて毎日此地に來臨ゆす
 傳へるは是ぞ實に權現の助力せしむる者なる最尊く思ひつゝかの
 補ひ色の似たりは是れあらん件の塊とらて見るも少くも遠はらり

熊野權現老父と化て
 曼陀羅修葺の
 繪具と与給ふ



ろそ奇異おき前つゝ画師巧の叶ざり六奇持と絶一中御くろりあし
 あゝんと弥信心と起り各力と得て同年閏十二月十五日修葺なり
 成就又文亀年中の寛圓比丘尼の願まゝ後柏原院の宸翰ありし
 新曼荼羅の再修同年十月十五日事務初て次の午の年二月十五日事
 畢りぬ又新一丈五尺の大愛相とて比末代の副寶として寄附ありし
 是と重新曼荼羅と申し然るふかゝ愛相の銘文古例のありて最も異と
 當今の帝の御手自筆深きその事おき上人此由と朝廷に訴へた事
 有難くも勅許ありて宸翰の銘文とて下され其上貴と賢聖の臺不
 古愛相ありて件の新圖兩幅かゝるも玉の御冠と傾けさせのひね近端
 左大臣と初と緒寮百官ありて拜ませりて侍又その古曼荼羅より
 糸乱雜なる所の藕の糸の微層おび積るゝその香薰乃粉塵ありて
 拂い下りて拾うと拾と數針あり高懸より人あり一行りて懸し流製
 一粘り丸く名成曼荼羅種とて是と有縁の道俗と施すゝのふ

當麻寺の門前とて
 郷中の端より道左右
 分る左の女當麻
 公木に至る長谷寺に
 行進すと右新庄
 五所と経て壺坂寺
 此の慶礼の街道と
 此の道の傍に正堂あり
 此の傍に大の木の
 五輪あり傳云當麻
 真人國見の境あり
 國見當麻寺草創の
 麻呂吉親王の御して
 天武天皇の朝の臣と
 日本紀出



其信のつゝもる人の数日、光明のやゝ或は色轉じて五彩とあり或は増長して大顆となり又ハ分散して小舍利と現たり妖怪ありて怪しきあり又沈痾ありのあど一度も成頂戴し少くも咽に汗をさるるに勿ち不祥と除さ心正しかり病者ハ快氣し又ハ称名して臨終ハ斯のぶこれの利益にいつ者世々多しト新著聞集に見くあり

奥院往生寺

本堂の西の方より本堂圓光大師の廟と安んじ傍に阿彌陀堂ハ大庫裏樓門に懸るる當院も寶物ありて其廟に本尊阿彌陀佛ハ惠心僧都作

當寺に安置する源空上人の遺像、桑原左衛門入道真像と寫す行くと上人自開眼四十八度満ちひ靈像なり其初、洛東智恩院よりて去歴と經りしが十二世誓阿上人の時或夜の夢に我額に釘と打りありて苦悩忍びがじと翌朝拜禮するに誠し御額如何なりん竹釘と打りたる是と拔血の流る事肉身かゝる事あり又或夜の夢の告に我本師ハ當麻寺に曼陀

羅あり彼方に移し居りし彼曼陀羅堂の乾八切池にて千世の青蓮花有と教へさせむひて夢ありて衆僧のやゝ當麻寺に巡行して尋ねまじも道華あり思ふに役小角む諸神勸請の所清淨の地ありとて去りてやゆま地底に青蓮花有り則ち堂と建て遺像成りて往生寺と号し

練供養

例年四月十四日

十二日より十四日に至るは法會と修行ハ中將姫の忌日ありといふ傳へ忌日の正當ハ二月も三月も今月行はる事故なり

練供養縁起曰此來迎引接の法事ハ惠心僧都成置り此僧都ハ生國ハ和州良福寺と云邑の人也難涼の後永觀中獻山して此法會を行ひ始め其後寛弘元年の頃僧都美寛印供奉し共此所來迎の本尊又二十五菩薩の假面と彫り同二年二月十四日法如往生の日に以て迎接會を行ひり是則ち横川花堂院より寫し所なりと云四月十四日一鏡ハ四月十四日惠心僧都よりて行ひり日ありと云當日の行儀ハ本堂より引接の香をて高き二尺の中四尺の床と掛り此上と二十五菩薩の形勢に出扮し練行あり出行ハ中將法如往生の軀かゝりて成佛の形ありと云其菩薩に扮し入郷中の回家して是と菩薩備へ号し古例なり

大坂山神社

同穴夷村あり神名帳出

天羽雷神社

當麻より凡乾十五丁許加守村あり今加守明神より神名帳出

龍峯寺

同加守村其別あり傳へる所の神代の皇子より龍化し雲に乗じて行方ありあり其追福のこ建のひ寺なりといふ實説詳あり

腰折田古跡

當麻より良の方并丁許良福寺村よりて田圃の字に殘まり

垂仁帝七年當麻邑に力勝たる人あり名を當麻の蹶速と云り
角と云れ釣あどとのべぬに最安くりま世の中我小并おん力に
んやし心し思ひ詞に出ても結をれば天皇かまに合せらん力人
出で傳聞出雲國一野見宿禰のりり渠とて力勝を侍も奏り
こゝに渠と召せとて其日倭直の祖長尾市と勅使とて野見宿禰
角力と取りめいよまひ小蹶と云りりり遂に蹶速が腹骨と蹶折
ひより勝る賞に蹶速が地と野見宿禰賜りまると腰折田と名
舊址遺り也と日本紀

福應寺

右良福寺村の隣村狹井村より惠心僧都の誕生の地なり

天慶五年のくはま其古跡ありト云
釈源信姓ト氏大和國葛上郡當麻郷の人也父の名正親母清氏より
父母より子あり事と懸して其郡の高尾寺に詣りて子と祈りれば母に夢
に一僧来ると一顆の玉と与りりり覺て則ち懐妊の心地なり終に月より出産

考婦伊麻舊趾

竹内村より當村當麻より一里許南より竹内越の時東下る橋あり街道の傍に
標石あり今申年百五十年の遠忌に當りて村中より是を吊りて標石の傍に新塔を
奉吊考女伊麻心譽妙祐禪尼弟壹百五拾廻緯離苦得樂之寶塔

弘化五申載孟夏上七日

○里人其家より今絶て子孫ありり

りり余有源信幼雅の時夢に見らま高尾寺に蔵ありりり其蔵の中に
許多の鏡ありて或大ある有或小あり又ハ明く物と照はりり又ハ暗く
て見ぬもあり斯る時一人の沙門あり其暗く少く鏡とて源信より
けれ源信の曰斯る少く暗く鏡何の用と云とや願くハ大く明くはれと
所望ありり有りま沙門の曰只此鏡とて横川に至りて磨くると言すは
夢忽ち覚る故に深くあや思ひもも成長の後叡山に登り慈惠大
僧正に事らりり始めて夢の事と思ひ合はれり程に精進修學のこげ
に時の間も退屈の色と見せば原兼天性聰明して頭密の教と究め五種法
師四種二昧の品とて修練せざる事ありり諸方より来て學業と兼る者甚
敷と知は時當て惠心院僧都とては居りりり續住持傳 寛仁元年六月十日遷化壽七十六
歳

近世崎人傳云大和國葛下郡竹内村一寡婦有り伊麻といふ年六十に余りて尚
 老る父一仕て孝篤寛文十一年辛未六月老父病甚ぐして日成経て
 飲食ともももれれば伊麻も亦々事頻りらるに何れ日少く病の隙あらば
 けり鮮魚を食はんと喰へども此山中にて見らるるもあれば如何
 とて感るに夜々更過て瓶の水を音り伊麻おどろけ怪しむとて
 見るに好り所の鮮魚瓶中に踊り出れば喜び取て膳へ進め是より父乃病
 日に快く常々復すも芭蕉庵挑青貞享五年四月は大和路を行脚の
 次聞て涙もろがごとしと傾て京に來りて書家雲竹に結る雲竹も又
 感るの余りに自ら大和行其婦の事とていんとせると門人友竹為代
 きて行その姿を寫し來りて即雲竹其圖像の上より自筆して紀せり同
 年八月既望と有り芭蕉雲竹もに聞ゆる人々見聞のたゞひる燈
 斯のどく實王祥が氷裏の鯉孟宗が雪中の笋と唯むりの物結
 の等閑に聞るとい人成驚く次は足跡とのりま

廣漢に住る姜詩母に仕て
 至孝あり其母常お魚の
 膾と好し且江漢の河水と好
 凡此河水と亦むるまきの
 道と隔とて是とて
 母に与て終て我家の
 庭中に清泉涌出
 毎朝鯉魚二献り水と
 踊り出れば是とて
 母に供りしや
 孝婦伊麻
 瓶の中鮮魚を得るも
 和漢同日の論り



長尾神社

長尾村にあり延喜式神名帳二代實錄未出當村當麻より壺坂寺にける頃路の道條
是よりむろ六壺坂まで一條道して凡頃路の行程ハ○先當麻より平田長尾今市小富余の庄を経て
新庄より二里半○新庄より花内新町より村本と過て御所より一里半○御所より第一
寺田御所車水兵庫薩摩と經る土佐の町に至る事凡二里許土佐の町に在鎮清水各村より
り此地も宿屋ありてより壺坂寺と經る凡土佐より壺坂へ半里余あり
左名所と尋るるハ此の通り街道の左右に路道あり行程も又右に倍はる心傳べ

布絶今市地蔵

今市村の入口右の傍に草堂一宇あり地蔵尊と其傍に草庵あり
虎石虎がく此に迎ふあり

當村地蔵尊ハ曾我十郎祐成の愛妾大磯の虎女の念ぶる所あり其初
建久四癸丑年祐成生年廿二才富士野に於て復讐の後空しく草葉此
露とさそりと悲嘆のりり飾成らる墨漆の女ありて寤に當地に
来り此草葺小路とて夫亡夫の跡成り同五郎時宗の妾化合坂の
少將とて其頃別駿しく此所小尋に來り二人同居して俱に念佛
修行しとてあん草堂の傍辺に小川ありて室に架せる小橋と虎が橋
と稱べり則ち虎が架せる所ありとて又堂前より虎石とて有是也
虎が墓とていりり草葺の畧縁記に見へり

現德寺

今市村にあり長尾小つく街道あり
蓮如上人傳遺跡 一向宗

影現寺

本尊十一面觀世音 鎮守社本堂の右の傍あり

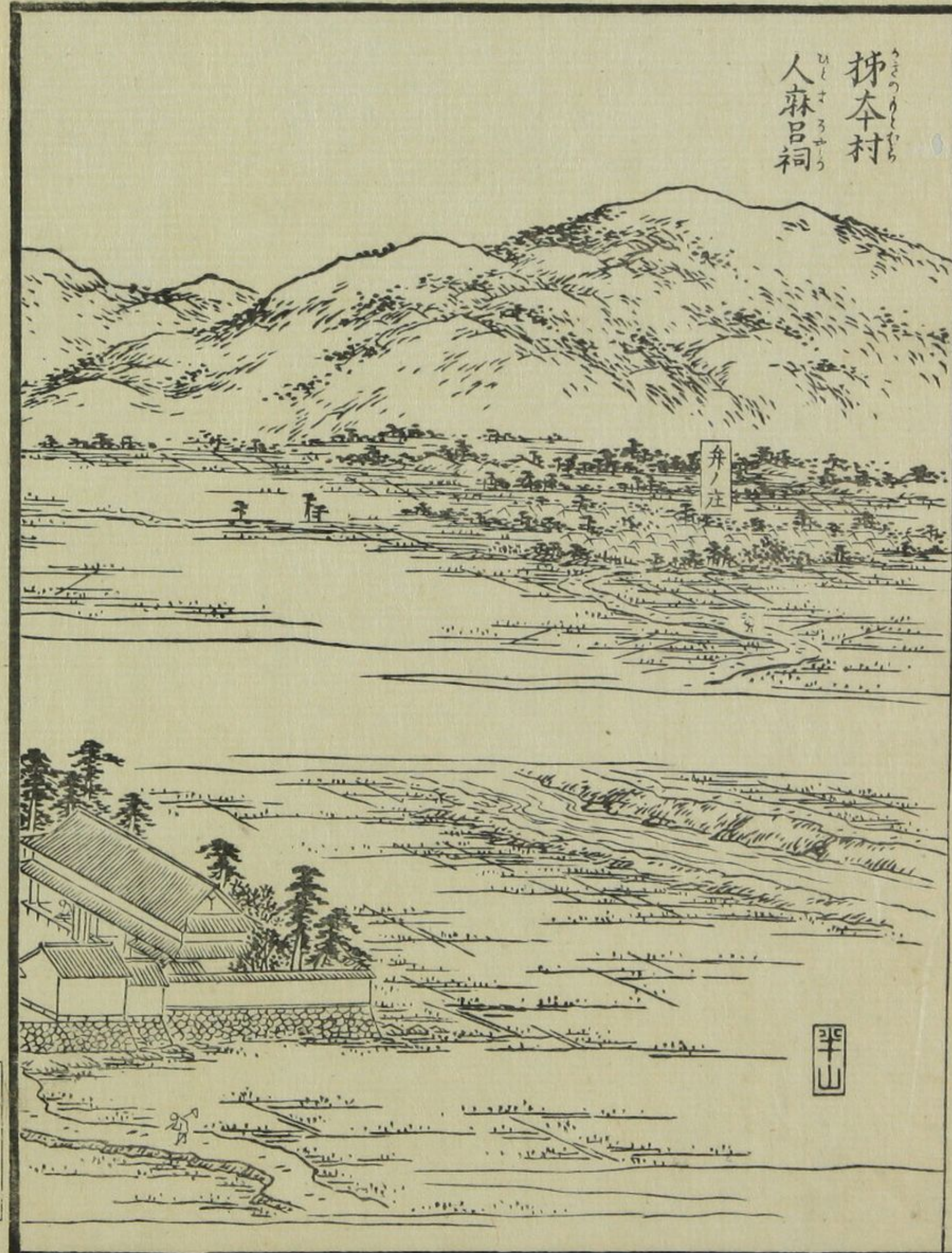
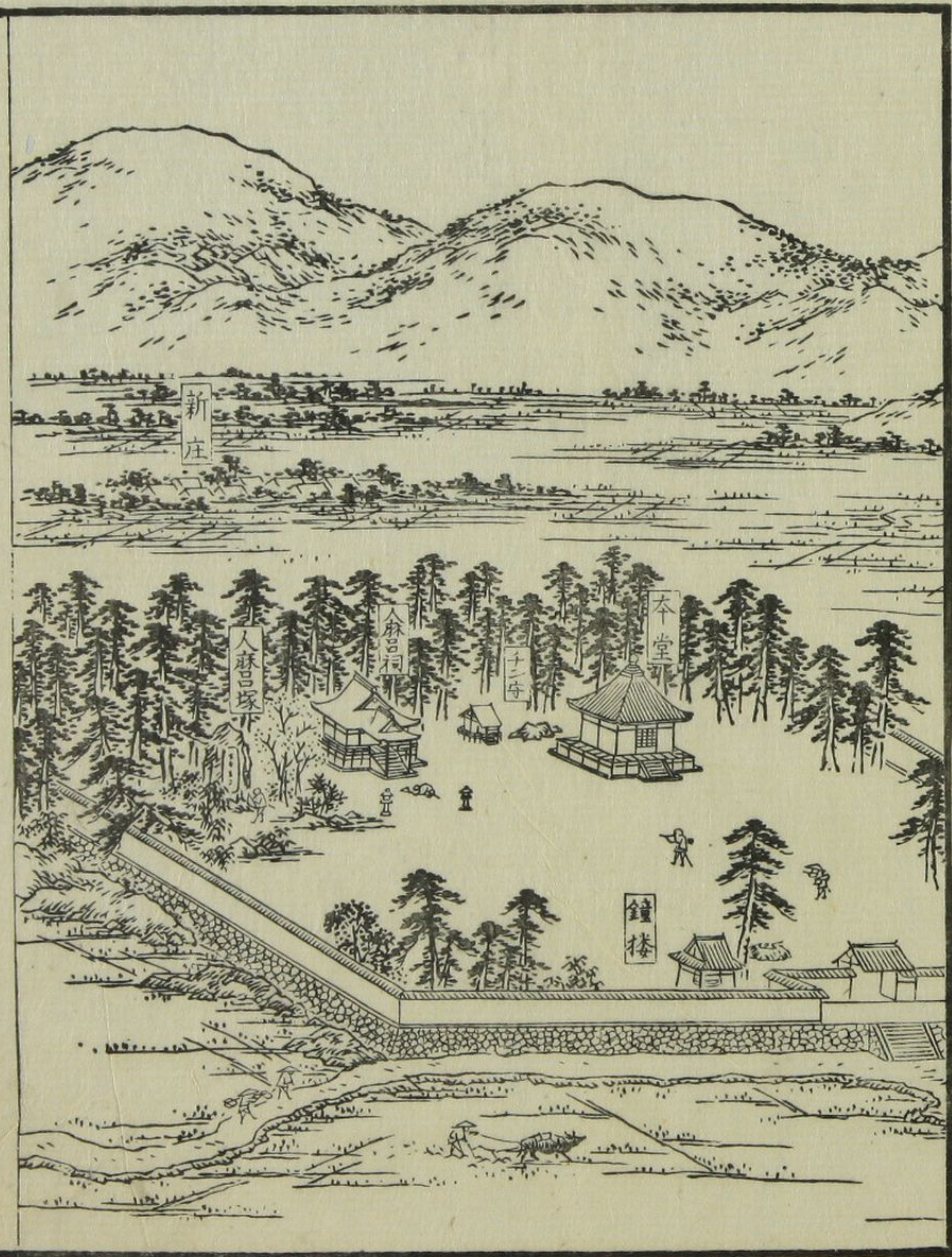
枋本人磨祠

本堂の右の傍あり

枋本夫人磨之墓

右祠の傍あり 碑石の高さ四尺寸許 臺石高サ一尺余
自然石にて裏銘あり左に記し

商山雲深不可攀不可陟挑源跡迷不可遊不可到然非天地之外是以
皓叟悠然以隱黃髮怡然自樂彼人而遺此也此世而遺彼人故車馬跡
絶為別天地者也偶有如張子房陶元亮者而得問商山得沂挑源也舉
世皆不知之豈子房元亮獨知之哉出塵之操與潔之情同氣相求同聲
相應也則商山之雲挑源之路豈必背人哉人背之也大和國漆郡初瀨
石上之邊枋本寺有枋本夫人麻呂之墳世移時替基趾湮滅會聞藤
清輔尋其旧蹟刻小碑詠歌而去其後鴨長明尋之不得矣問歌墳在何
處而始知之人麻呂者歌林之仙獨步絕倫者也清輔長明者十歲之同
士也試心所求豈不至乎哉猶子房元亮於商山挑源也和州郡山城主
日州太守源君信之一日語余曰其領内葛下郡枋本村有人麻呂之墳
士人傳稱人麻呂生于茲故後人建墓也盖其自歌墳所移葬乎今已荒
廢僅存旧礎是以修其寺院建小石欲垂不朽也請記其事太守初鎮播
州明石城浦畔以有人麻呂祠堂建碑請詞於我先人弘文學士詳記履



歷今又修其墳墓可謂能知人麻呂者也自然之好因不亦奇乎嚮雖有清輔長明然不遇太守起廢之舉則誰問其跡尋其風哉明石不遠朝霧接影人麻呂之霄息于此遊于彼長濟千歲之美也亦是太守追遠之一端乎其於事業則民德歸厚者可以期焉乃誌于碑陰爲後證
天和元年辛酉十月中旬
整宇林齋直民甫識

金村神社

新庄より西二町許大屋村より
神名帳三代實錄出

為志神社
新庄より二町許南林堂村より
延喜式神名帳出土三所推現稱

宇佐神社

新庄の東二丁許花内村の内あり街道より右の方
三歳八幡宮ト云

當麻山口神社

新庄より十町より坤の方山口村にあり延喜式神名帳出葛下郡十八坐の其二

遊の園

新庄村より坤の方
八丁許笛吹村より
笛吹祠
同上
大雷神社
同上
笛吹池
山口の隣村梅室

角刺宮旧址

忍海村の傍より街道より新町より右へ二町余村中の入口にあり
飯豊皇女の宮跡なり今此女王と尊とて生土神の神社なり例祭九月七日

日本紀曰 五年春正月白鬚天皇
崩是月皇太子億計王

賢興天皇
讓位久而不處由是天皇姉飯豊青皇女於忍海角

刺宮
修朝兼政自稱忍海飯豊青尊當世詞人歌曰

野麻登陸倭
我保指母能婆於尸農滋終
昔能拖舒紀惟屢

都奴安之能添野

忍海寺

右角刺宮の傍より則官寺より忍海郡忍海村忍海寺として至るの古刹なり今僅の草庵あり本尊八観世音にて長谷寺の尊像同本より多るは倭木枝木の観音と稱

神

又試の觀音とも号く
同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

神

同村道の傍より野口の森にも云私に天長年間老樹として千有餘年乃星霜と歴辰

袖の森
角刺宮旧址



眞傳
幸ふらむ
みづの
さつ
かづね
あも
あつじ

延喜諸陵式曰

掖上博多山上陵掖上池心宮御宇孝昭天皇在大和國葛上郡兆域

葛木大重神社

東西六町守戸五烟云

重丘

同上緑樹生茂り林中

葛木坐一言主神社

森殿村長田豊田官戸寺田五ヶ村の坐主神也
祭神ハ孔在明也一主神社に見たり
延喜式神名帳出

本社一言主神

左跡能不動觀音を安良社僧 眞言宗 一言主寺 本社の隣

攝社

神功皇后 本社左傍
二社 出雲大神 天満大自在天神 住吉明神 本社右列ス 寶庫 本社の左

護摩壇

神前石階の下

鏡石

護摩壇の傍

辨天祠

宝庫の左 下の方有

二之鳥居

松林の間

一之鳥居

森殿村在中

寛文紀曰葛城大明神ハ一言主とて女躰よりハ本葛城山の嶽宮

居のハ今其麓の田の中ハト云又舊事紀ハ葛木一言主神

大和國葛上郡坐ハ是素盞鳥尊神子也又天孫本紀曰火々出見尊十

二万六千年の時速刺利主神又一言主といハ日本紀曰雄略天皇四年天

皇葛城山ヲ狩ハ時一言主神出て天皇ト共一箭成放ち唐トあて

鹿城逐々夕陽に及び、時田を罷り、天皇と来日水を送り、此時村民悉く香徳の天皇とぞ賞ト多味
一説小穴六道尊子味鉏高彦根命 叙日本紀

續日本紀曰天平寶字八年十一月庚子復祠高鴨神於大和國葛

上郡高鴨神者法臣圓與其弟中衛將監從五位下賀茂朝臣田

守等言昔大泊瀬天皇雄獵于葛城山時有老夫每與子 天皇相

逐爭獲子 天皇怒之流其人於土佐國先祖所至之神化成老夫

爰被放逐不見檢前紀於是 天皇乃遣田守迎之令祠本處

此事秋日本紀も高賀茂朝臣等奏云葛城山の東麓高宮岡上り

むろく鎮め奉る見見土佐國見續日本紀其統あ入サト跡幽考云

神階貞觀元年正月廿七日葛木言主神從二位叙せ事之代實錄

不見然同時高鴨神從一位叙しり

按日本紀天皇四年春二月天皇葛城山に射獵人時見言主神

稱己面貌儀天皇に相似長人又續日本紀云所老夫りて

毎天皇相逐獲成争云り色大同小異あり然言主神二言主神六春二月の

射獵の時の見生て偶一鹿城逐夕陽及びて天皇と来日水と送り

奉らまり又續日本紀云高鴨神毎天皇と相逐獲と争り

あまい老夫と化して毎度見日のあまい尤天皇ハ性質尙健と云せ

一也毎に射獵出り事少らず見て然まが之代實錄云高鴨

神二言主神六別有其事の似とを以て之神と同く世の人尙考らず也

拾遺 岩橋神教の變心給ぬと云りる傳と云葛城の神春宮女官人左近

續今 鹿城の所出り乃神の文二言主神六也云加茂氏人

續後 葛城此神を名ひて流れんと云りる也云贈後位子

古事記曰初武天皇登幸葛城山之時告曰雖惡事而一言

雖善事而一言言離之神葛城之一言主之大神者也天皇

於是惶畏而白云

神社考曰三井寺山伏入峯者諸余曰昔入峯者問神名神名

曰至從此以主一言高号曰一言至神云

往昔役行者小角葛木の嶺より金峯山へ渡る其間危く嶮し此所を苦行の者といふも尚此道へ親む事ありて石橋を架し通路を開くべしと此事成山神は余は衆神の命とても亦夜に岩を運び管むと巖をかり然も其成就ありしに役行者曰く何事か斯く成就遅くは哉と對て曰く葛木の二言主の神容貌つと醜く有りて畫成へし一夜にやちてある也と自ら其日を歴るるに行者安んじ思ひて一言主は權使とていふも一言主がつて皆言はざりしゆ大いなる呪縛の法と行ひてを索とて呪縛深き谷に懸て置りて此事書し見く古言つてつる鏡なり故に奇人多くひる成つて明る事の怪しきとと録す 芭蕉翁の句も

高宮廟

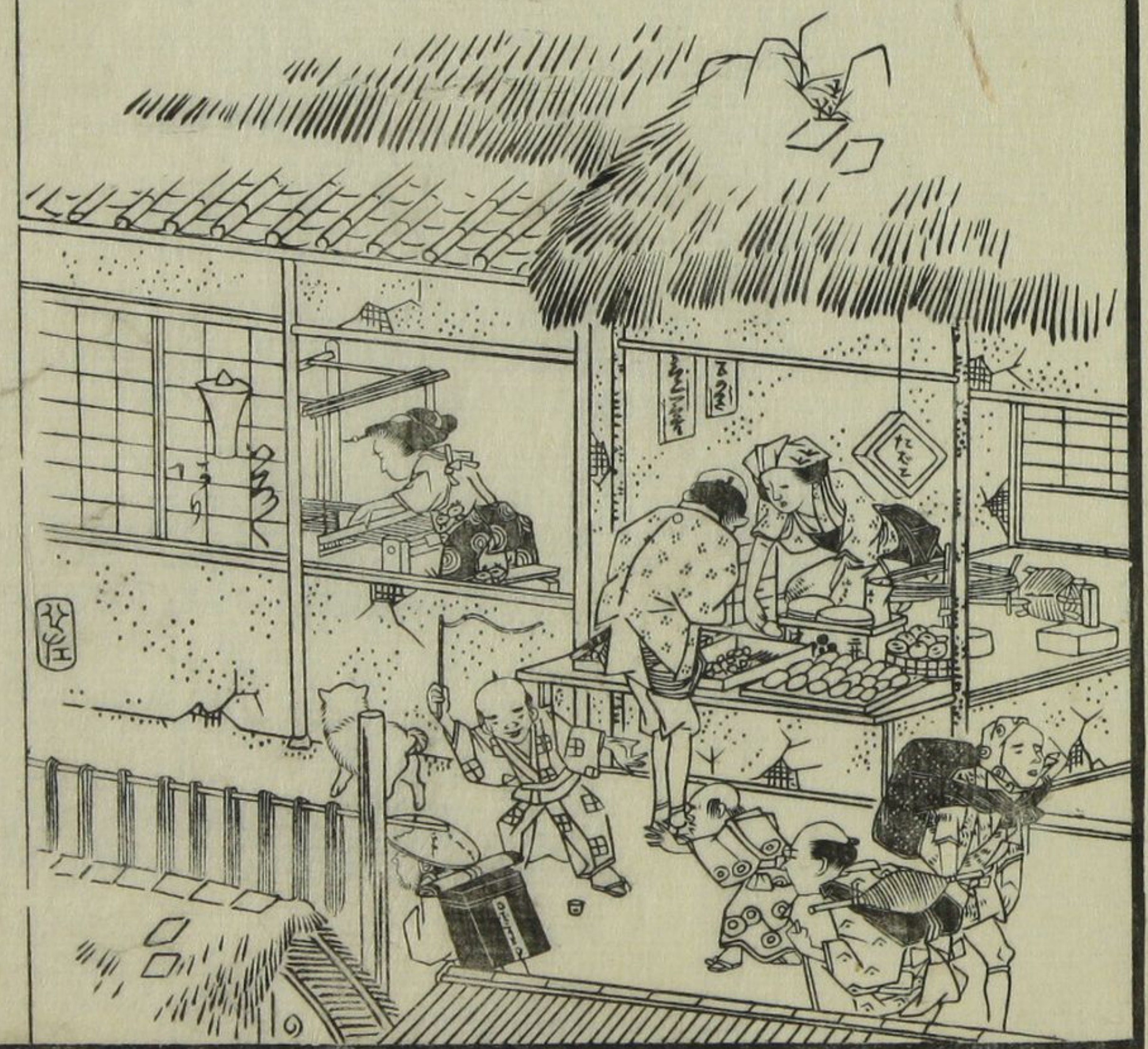
森殿村の蘆根蝦夷の祖廟あり

皇極天皇元年蘆根大臣蝦夷祖廟所と葛城の高宮に在り日本紀見よ

池心宮舊址

又古瀬の水尻村に今木の双墓あり一は入鹿の墓なり存倉中に然るおき墓あり

五所新庄高田の辺に惣て木綿の織する事とて種々の異なる縞の類い或は縞の糸と交てりつじは縞と織出れや家毎の手業とせり是故世に大和縞と号して各産しこれ村中に藍染の紺織を多く織る糸と漆で軒端より表の傍に機織屋女小奇と稱い妻は糸繰老婆旅哥といふ丸の長は仕入の商人あり氣の短と織屋の親にりつて恰もいふの如き盤の音振音に混して甚静らむとて正に土地の榮つて



茅原山金剛壽院吉祥草寺

伊所村の街道より茅原村にあり二名茅原寺といふ

本堂 五大尊 中央大聖不動明王

降二世明王 軍荼利夜叉明王 大威徳明王 金剛夜叉明王

行者堂 神愛大菩薩

役小角二才の肖像と彫刻

観音堂

本堂の右の傍あり

笈掛杉

門内左の傍あり 役行者の肖像あり

伽藍神社

祭神熊野權現

行者堂の左の傍あり

香精水

熊野の社のあり

護摩壇

行者堂の前にあり地土あり

鐘樓

笈掛杉の傍あり

當寺人王世五代

舒明天皇の創建として役小角の開基あり則ち此地は小角

誕生の所として行者出誕する所と凡一千二百十有余年の古跡あり

役小角は賀茂の役公氏として今の高賀茂と言ひの也和州葛木上郡茅原

村の人より少くも悟を敏く學ぶ事博くして益々佛乘と郷あり然るに

年二十にて家と棄て葛木山に入巖窟に居る事二十余歳藤葛を衣とし

松果を食し亮らるるに凡孔雀明王の咒と持ち五色の雲に駕つて仙府より

優遊し鬼神と驅逐て使令し凡日域の靈區と修行遍歴して殆ど一

言所あり然るに文武天皇二年饑言の爲に豆州大島に配流する彼方居

る事二年が間晝禁と守り居るに夜に必ず雷士少に登り其

道を行くと海濱踏で走まると穴も陸と行い異あり其疾く飛鳥も及

ぶぐぐ大賢元年廻る事と放る終り同年六月七日母と針を載せ海に

投んで直に入唐して去り 壽齡六十八歳 或六十九ト云

版上唾間岳

街道の左寺田村の北野許あり

神武天皇卅一年四月帝唾間岳に

登り給ひて國の状と見らるると内本綿の真途國のくも蜻蛉の醫吐の

如く宣ひし秋津國の名あり醫ハ尻あり咄ハ掌あり西ハ額東ハ腹南

北ハ兩羽あり 秋日本紀

孝安天皇陵

街道の右の玉手村より山高九間余廻凡百六十間許 御陵山或官山

前王廟陵紀云

玉手丘 陵室秋津嶋宮 御宇孝安天皇。在大和國葛上郡北

城東西六町南北六町守戸五烟 諸陵式 今按玉手丘玉手村是也。在室村西北河東

茅原寺



役小角贊白

道德全者鬼神不得而窺矣。役君神異可謂不測者焉。然遭神誣受竄譴，豈咒力有未充之處。與古記曰：道昭師在唐時，五百群虎共來作禮。一虎人語曰：新羅山中，衆虎之所伏也。願師赴山，導我暴孽，昭默受請，乃至彼講法華。群虎側聽，其中有和詔者，進曰：我是日本國。役小角也。昭愕然問曰：何在此。對曰：本國神曲譚，是以我遁去。化異類耳。然或又有往矣。云云。元壽紀



白鳥陵

同富田村より人皇第十二代 景行天皇第二の皇子日本武尊の陵あり

日本武尊東夷と七ヶ一帰陳の時伊勢國能褒野よりて薨すの御歳二十
歳即ち終褒野の陵に葬奉り時白鳥と化し大和國とて飛ゆ
ふ群臣推しひて見奉りて只明衣のより白鳥大和國琴彈原に止り
せのひに其行の陵と造り又白鳥飛て河内國舊市邑に止りあひし

陵と此も終て白鳥の陵とて終 天翔ゆひに衣冠と葬りて日本紀

彈琴原

富原各兩村の

葛城川

水源金剛山より流れて出て持田寺田御所村を経て

檀原宮

日本紀曰神武天皇畝丈山西南檀原宮都はトス

大和巡覽記曰畝傍山今井八木の南道の四五丁西より山の麓に畝丈村柏倉

村より神武帝の檀原の都の地あり一説小山の東大久保より所檀

原の都の跡ありと云日本紀曰神武天皇長隨彦より天下と定めたまひ

畝傍山の東南檀原の地八國の真中あり故に都とほつて見ゆ

佐田丘

佐田村より萬葉多く出佐田の崗

重坂川

水源葛上郡よりあかん壺坂川に落ちい檜隈川入 高市郡属

神武天皇
喉間の丘
登りて國中
見ゆ

本朝通紀曰
帝登高丘望見國狀
猶如蟻於是始名
秋津嶋



半山

名寄 物あつてついでにゆん佐田川に枝さうり大わらじ

此辺より真弓檜隈の名所一近一とて奥の岡寺のついでに出せらるる滝は志士佐の町に滞留して此辺に順覧せらる可なり然るも先子を順覧のすに記之
土佐の町の上の方より今高取山より山勢峭拔して一郡の王山なり

相摸家集 物人のふね日あつても存る戦山乃緒さのいづるかどじさ

高取山城 土佐の町と登り凡五十余町あり坂路羊腸くは是要害の地
南朝のついでに築き北と南と築くは今人 極村度領一なり

竹取 今高取と書き洞林採葉は竹取の旧跡大和國竹取の城とておとつて聞
是ありし竹取物語の翁は駿河國大綱の里に住一人を別の人を侍らん

萬葉集 昔有老翁號曰竹取翁也此翁季春之月登丘遠望
忽值煮羹之九箇女子也百嬌無傳花容無比

中畧 翁歌 死者木苑相不見在月生而在者白髮子等丹不生

八方 又娘子等行歌九首の畧

子嶋山觀覺寺 千手院ト号し世に子嶋寺ト云ふ天正年中建立の古刹なり後世大
變に迦來再建り有て追々回觀復る形勢なり

本尊 大日如来 開山堂 本堂の上の方 真言律宗
此地土佐の町の北の端あり

人皇四十七代廢帝天平寶字四年 報恩沙弥高市郡子嶋神祠の畔に伽藍
と建て一丈八尺の觀自在菩薩の像あり四天天王の像と安せし其寺と名づ
けて小嶋寺とて之を親書見し

子嶋神祠 報恩沙弥延曆十四年二月に寂すと云ふ又中興勝悟法師
小嶋村にあり今春日と稱し土佐村にも小生玉神あり

高生神祠 舊高取の山上あり天正年中土佐の町ついで清水谷村よりついで云
三代實錄に出例祭九月十九日 清水谷一村中小生玉神二社あり當社東の方

清水神祠 右同村より 是西の方の生玉神とて 例祭九月九日

清水井 右同村高のやと云ふ在家の内より近郷にあり清水泉なり

靈鷲寺 土人曰此清水のよりて地名と清水谷と号し

越智家之墓 桃源山常喜院と号し清水谷の山方あり本尊華師如來左右十二神將列
千餘佛の華師如來厨子の内に免闍旛殿檀の左右不動明王弘法大師と安ん
草庵の上の方古墳の石塔五基あり之基は文字滅しと見えは漸

其法名曰岱浦光密居士 天文十八年己酉六月五日

天仙宗祐大禪門 天文十九年庚戌四月廿五日

土人曰越智玄番頭の墓と云ふ越智家八代々大和國に住み和州諸將軍傳云應永二年高井の
初代頃永の麾下とあり又天文元年辰の春南都合戦の條下越智玄番頭利之は高取の城主とあり又
大學助利之は同族弟小治郎利祐とあり同書高取玄番頭越智利之は和州高市郡高取山乃
城主知行一萬五千石頃慶の姫婿あり慶下土佐木飛鳥氏五千石合せて二萬石也とあり天正十二年冬
十月二日高取山の城主越智玄番頭利之四十八歳とて死去せり勇武の士也とあり然るも此墓は
玄番頭の墓とあり余二基の内あり大和名所圖會に越智家墓とあり是は何と以て歟

著せり哉家教とて事考と考へて寺僧と問ふも曾て知るよしあり尚考ふべし

波多羅井神社 清水各の隣村羽内村より 今天照大神と稱し神名帳に代實録より出

第六番 壺坂山南法華寺

清水各村の東壺坂山にあり 俗に壺坂寺といふ
清水各より登るに十二丁 直念言宗 本堂巽向

本尊 千手觀世音 長一丈二尺道基上人作 本堂二間八角造拜堂八間二間

觀音堂 拜堂の右の前の有正中ハ 二層塔 拜堂左の向より 鐘樓 宝塔の上の方

歡喜天祠 綿荷祠 金毘羅祠 辨財天祠 東傍小列

二五門 觀音堂の右より 鎮守龍藏權現社 大門の外泰清道の傍有言野川赤根が淵より出現の龍神と云

當寺八人皇四十二代 文武天皇大寶二年道基上人開山 元正天皇養老

元年勅願也ト云 寺記 靈驗紀 真鈔曰壺坂寺丈六千手の像ハ道基上人乃

開基あり然るに此道基上人千手の咒と誦する事毎日千遍余に及ぶ晝

夜臥せりて生身の觀世音を拜せん誓ひて或昔山霧に添て瑞光有

怪しく光るの本を尋ひ登るに一箇の靈壺ありて光るを放つ道基上人此

壺に向ひて千手の咒と誦して生身の千手大慈の像と拜せん祈りに

忽ち丈六の千手の像大光明と放ちて此卷に出現のひて云く汝年来此信仰

厚く依て此壺の内より出現し我像とく刻して此卷に留りて安置せば遐邇の

男婦と安樂世界に引導をく告めして化す道基上人信心歡喜の眉

と開たれ依て千手の像と彫る 差我天皇願年成りして精舎を建立

す今壺坂寺といふ是也或云 桓武天皇の願主報恩大師の開基とも言

ふ二事少く異いとの並記に疑ひれと傳ふる者也

按大和古跡考に開山ハ元興寺海辨僧正也といふ然るに縁起に報恩沙弥

といふ小島寺と壺坂寺といふや然るに報恩沙弥ハ天平寶字四年和州

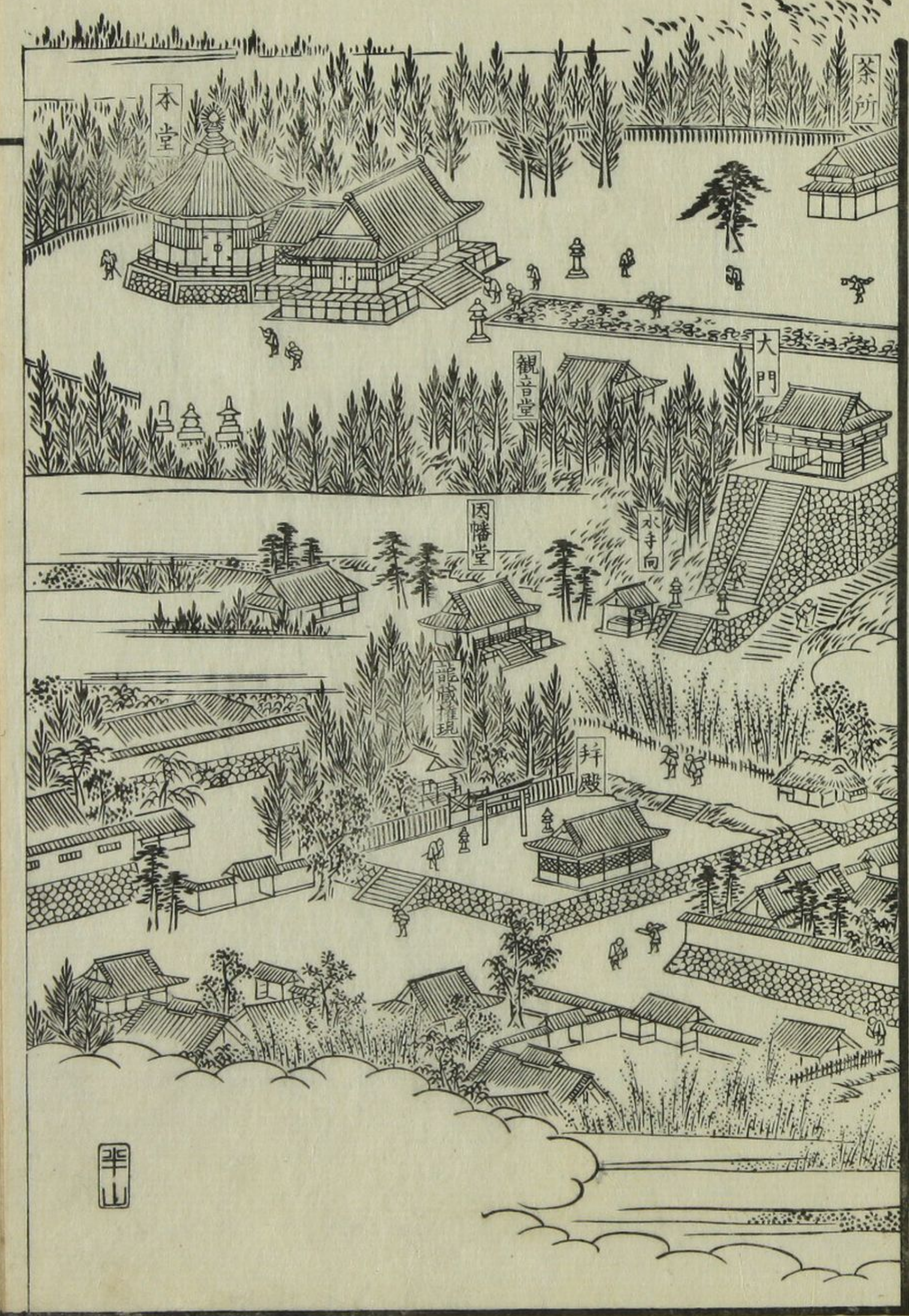
高市郡小嶋神祠の畔に伽藍を建立し一丈六尺の觀自在尊と四天王乃像を

安置して子島寺と号し子嶋寺ハ土佐の町の東十町あり有壺坂寺ハ土佐の町

の東南一里あり南法華寺と号し本尊千手の像ハ道基上人造也開基

ハ元興寺の海辨上人也 又帝王編年記曰文武天皇大寶二年卯春佐伯

姫足子の尼善心といふ者有て高市郡南法華寺を建立せり人也 眞應集



第六番
壺坂寺

本淨白子嶋壺坂の開基別也。中古より一行の寺ともまき山院の時分真身阿闍梨の入り入り是と世に子嶋の先徳といふ。今密宗の秘事と傳ふる。子嶋の流といふ壺坂といふ然も一寺といふ無帯せり。今子嶋の古堂一宇而已りて四丁より東の山に登りて開山の石塔ありき。

右の靈場紀の大概あり。子嶋寺の事ハ前よりハせり。當時の住僧壺坂寺の長老あり。然も今も無帯同様相續せるあり。

一説小道基上人の原元興寺の住侶とて智徳名譽世に開山大寶年間此山

光明赫々たる怪々必以靈地とせん。攀のりり日夜靈應と祈りたむひる。

或時千手の相と現ト千眼光とを放ちりり上人歡喜斜めり。即ち尊容

とらり水精の壺納め安置しり元正帝是と聞くと養老の始り紹有る。

大士の肉燈八葉の蓮華に表し八角の殿と建營。其外禮堂宝塔鐘樓經

藏魏々りり。原兼光寺の靈驗新々るれいと五千四代。仁明天皇兼和

年丙巳十二月小定額正一官長の檢校とて宣下りり。續日本後紀に見たり。

因幡堂

二王門石階の下より觀音三十二躰岩上出現の像と安ん前の領王本因幡守建三あり。因幡堂内左の傍に大和納言秀長本因幡守同左京の木像と安ん。

大和納言豊臣秀長公之像

長等身

大光院春岳紹榮大居士

天正十九年辛卯四月廿二日逝去

壽五十二



和州諸將軍傳云天正十九年辛卯四月廿二日大和泉紀伊の太守從二位大納言豊臣秀長生年五十二して和州郡山の城に遊中村弥助昌吉入道筑阿弥が三男として秀吉の弟あり壯年より秀吉の副將として諸度の戦場にて智勇數々に違ひなき其量も寛仁なる故に天下拳つて惜り母堂大政府悲嘆甚じく絶食絶氣となりあり豊臣家にも愁嘆落涙甚じく近江中納言秀次丹波中納言秀勝ありび浅井彈正長政増田右衛門長盛南治部三成等として急病中より郡山に住り天下の名医等に命じて看養せむ今又諸寺に於て追福品ありき

不動滝 聖天滝 北山覺房墓 抜殿地藏 瀧の不動 矢取地藏 木境内有

五百羅漢石 兩界曼陀羅石

壺坂本堂より凡八丁入り東高取の山中より巨巖の石一巖石多し高香山と号し真興上人造立すと縁起に見たり又慶長年間本多俊政創立すと云い寛文天和寺社紀曰高香山とて壺坂より八丁程東の方に近き頃本多因洲安置のゆへに五百羅漢と云い付たり石面觀のゆへに切付る石佛あり多し又石羅漢石の前には燈爐一基ありて勒して曰慶長十一年本多俊政創立すと云い近來して有るも今見れば惜むべき事あり詠哥 山をたててみ流るる壺坂の危殆いとも深きありと云

岩と云ふ此山の景色と初言出せり水とたてて壺と言冠辞と壺

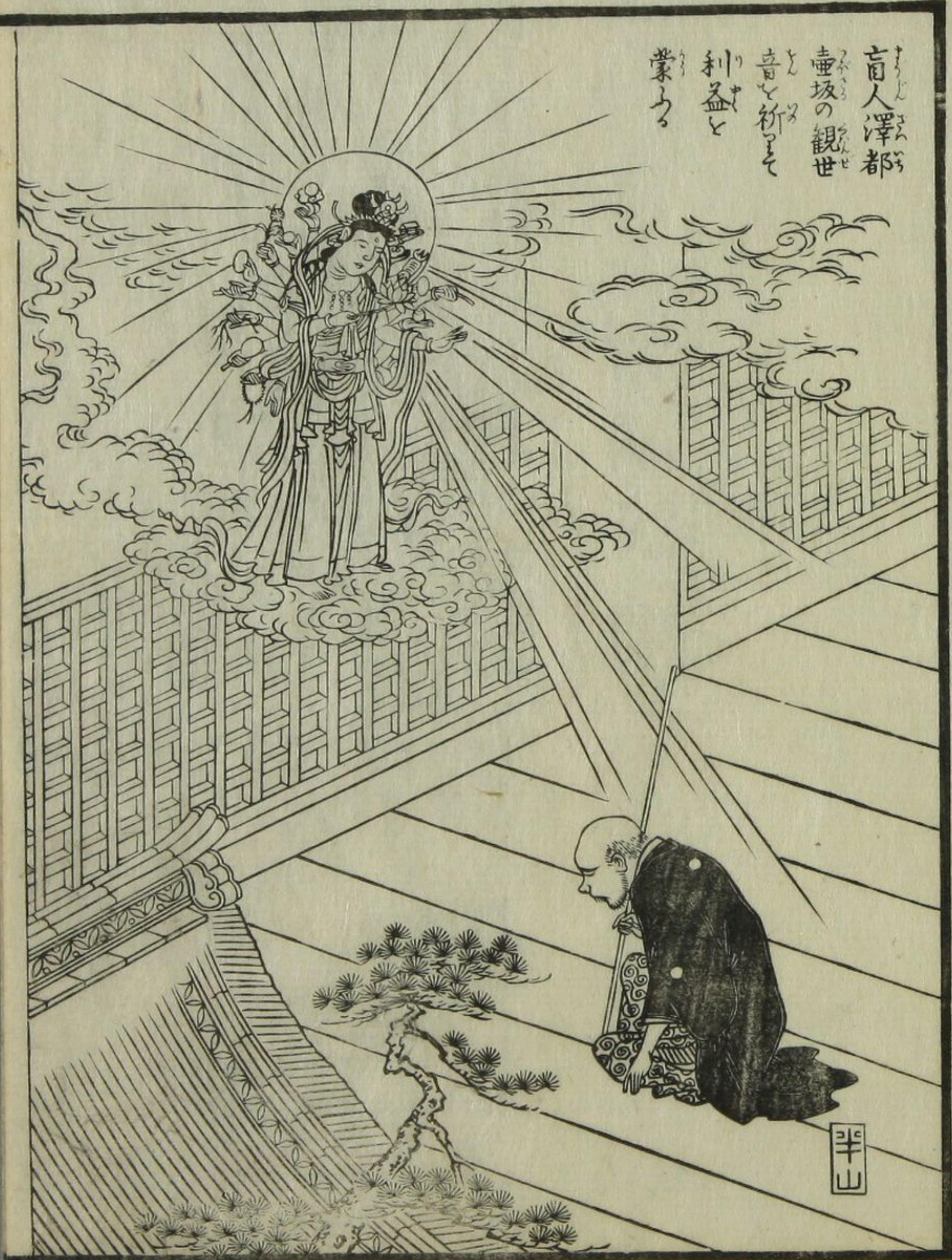
水成たり物あり故に庭の砂と云ふ下此寺と極樂浄土と準つて録せあり岩と立水と湛り形勢と極樂の八功德池に觀るべし庭の砂も則ち浄土わろと録り無量壽經に極樂の八功德池の水庭は金沙と敷り説き意に據まの詮なる所此寺に泰清觀世音と念と奉るに外に浄土に有るに金

此に安養界ありと云義あり觀經小説當座道場生諸佛家要解曰念佛の行者一心不乱の時佛現し聖衆護念し給ふ我草のつり忽ち浄土とあり眼前の草も極樂の寶樹とあり是と云昧發得と云然れ今岩と建てる浄土の樓閣と見え水と湛りと拜するに八功德池と見え庭の砂も浄土の瑠璃地と變る心成録との云

極樂と遙けを録すこと動つてはありき也
抽きまじやふと云ふ極樂乃ち極樂も重なるや
去るに時よのけも極樂は乃ちまじやふの中人



靈場記云 當山の觀世音と祈りて其感應と蒙りたる輩數は過一寛文の頃
 及當所の辺土佐の町に澤都といふ盲人あり當寺本尊の未歴と傳へ聞り桓
 武帝の眼病平愈の御喜びより造りてあれ佛の慈悲ハ平等ハ高下此
 隔ハありと我も又此觀世音と憑まんとやと思ひて一日泰續して一心一念トテ
 言ハやう言ハやう既ニ三年に及びぬまば兩眼明らうと願ふと只大慈
 大悲の御加力トてせめて昼夜の分ちを知らうと成下さまじと一向打願い
 夫よりして風雨寒暑も厭はれ日泰しく千日満じあれも念せるまじも
 冬よりまば澤都大い腰と立てり聞る御佛を神社に請て斯まて侍
 あばやうハ驗も有る情も佛とて頼り悔も杖より上て其辺
 比敵なき一首の狂歌 酒壺と轉臥する壺坂の堂も佛と同一土塊 かく
 續て揉み悪口と歸る後より澤都とて呼聲のり誰あへん振返
 きば兩眼忽ち開けて盲なる以前も猶明らまば沢都余の泰けをまば
 地へ投て雖有涙もむせびつ前礼と悔く禮謝の爲に其夜堂内へ通夜



盲人澤都
 壺坂の觀世
 音と祈りて
 利益と
 蒙り

室号と唱りて曉る少く寝る夢の本尊つきて宣く汝罪業深きゆ
盲人も成りあり眼を明く得たりとも頃て悪趣に墮る何の益ありん此
祈と縁して毎日歩む運びる其四徳はうて身中の罪障悉く消滅し命縁
盡る夕六日出度浄土生ぜりめん思ふ故に徳を今日まで捨置しごとく御告
りりまはば京都の威徳むかひかきと喜び信心肝に銘し夜明ければ吾家
歎其後一日も怠りなく日参し御恩の程と歡びも斯て生涯病おく暇む
りちして生前に産業多し事あり老後に至つて善て死期成知り臨終正
念して大往生と遂りておん所の古老翁の物語目前に侍り伝書記し
後人の信心と催り縁しりやと思ひ侍り嗚呼大悲の御誓ひ最深甚きもの
よや信どぐ又崇むむどぐ

當寺より第七番岡寺に至る直徑再び土佐の町に戻り夫より岡寺に詣り
行程凡二里余又吉野より多武峰廻り岡寺に出来凡行程十里余先吉野
に至る壺坂の門前より左坂と登り峠より十町許下り

右 下市高野の道
左 ちべ比叢寺道

又夫より十五町過て岐路 右 越部 左 比叢寺 此所農家一軒あり 越部村の内 越部の一箇家
とのへ是より比叢寺に至り吉野六田川に出る凡行程一里許又越部より六田川
出るも里數大抵同し尤檜垣本より下市に至る吉野に登る六田川の南岸に至る

比叢寺

池田莊比叢村の一名現先寺又名吉野寺のへ
今廢し林中に伽藍の古礎と存し

吉野郡

日本紀曰 欽明天皇十四年夏五月戊辰朔河内國言以泉郡茅渟海中梵
音震響音のりて雷の声のごとく光彩晃曜あまの日の色のごとく天皇心異つみ
ゆひ溝辺直と遣り海に入て求訪溝辺直海に入て見る樟木の海に浮る
玲瓏あり遂に取て献る天皇畫工に命じて佛像二軀と造りむ今の吉野寺
先と放つ樟像也 佛像時先と放ちりてあり
現先寺とあづかる

靈鷲山世尊寺

右比叢寺の廢趾より曹洞院禪宗と則
當寺は吉野子守の神社の此方獅子尾坂の上ありて慶長と後寺の再興に

本尊

釈迦牟尼佛 是比叢寺の本尊として日本木像の初也

太子堂

本堂の右の前より
聖徳太子御自作の尊像と云ふ

大疑堂

太子堂の右の傍より文殊菩薩と云ふ
大將堂の額と掲げ開山雲門之書

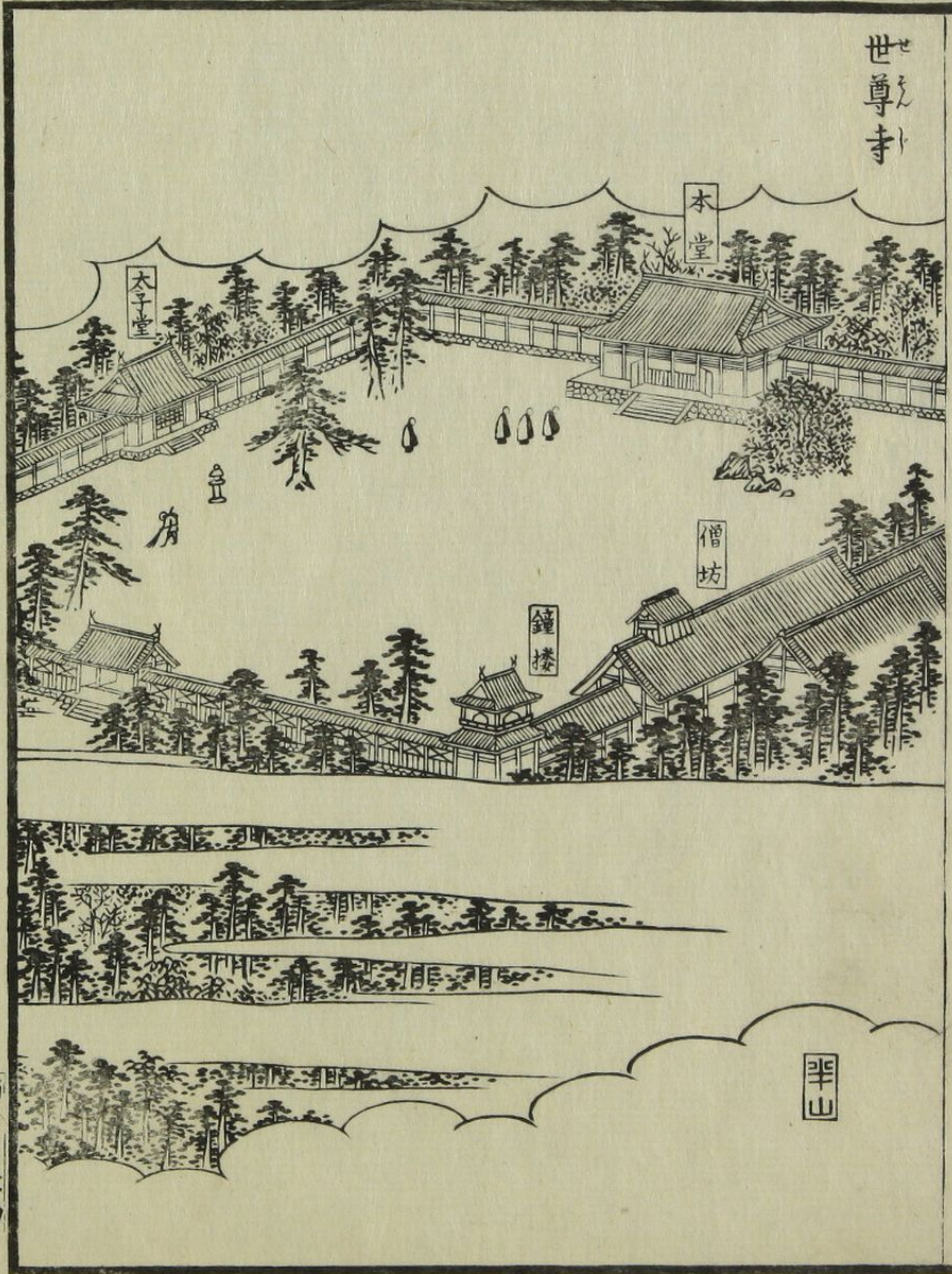
中門

本堂の正面より廻廊左右あり
靈鷲山の額と掲げ

鐘樓

中門の左廻廊の端より

世尊寺



此地奈比蘇寺の旧趾あり
 也境内の林中に古礎石
 許多存せり尤今尚當寺の
 本尊に安置する所のハ比蘇
 寺の灵佛にて日本本佛の
 くらりもん所也此灵佛
 折光を放ちのち也
 比蘇寺と現光寺とも号
 二代実録曰
 遣使者於現光寺
 燒燈觀綿以修功德



鎮守社 天照大神宮 惣門の内左の傍にあり

比菘寺古瓦

惣門 中門の正面にあり

径六寸

比菘寺之古礎

中門の傍林中に碑多あり往古天竺僧に遺り
思ひやるとき地中に古瓦と掘出たり
近來予得て藏之図のよし

厚一寸



六田淀

世尊寺より六田川の渡場まで凡十五丁余 柳の渡より六田の向ふに六田村あり
是則ち吉野山の麓にあり六田の淀又六田川とも六田の河とも万葉集に出

義詮

新拾遺 六田の淀より六田川の渡場まで凡十五丁余 柳の渡より六田の向ふに六田村あり

大宰大貳 重家

吉野名産餅鮓

下市村より下市へ六田の川下二里より餅鮓屋弥助より六田年々郷中より皇都
小献上の鮓も此家より調味其製吉野川の鮓よりて鮓は是と盛器釣瓶のからし
似たり故まつ鮓のく其味は美あり

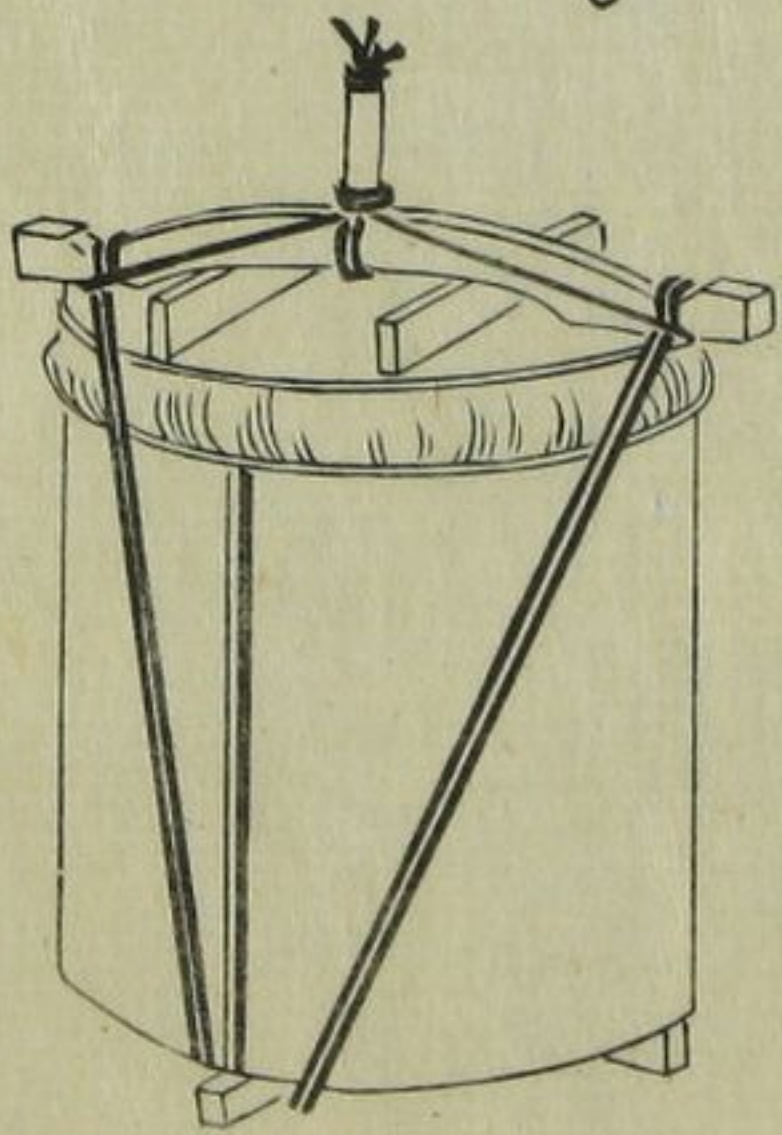
鮓桶之圖

樽の曲桶に漬つて藤葛と以て上を糊せ
桶の寸法凡高サ一尺七寸許

土人曰例年吉野七郷

新任下市阿知賀六田
飲貝上市増田

院御所より高家の方に鮓の鮓と



献上来るごとく年久しくして郷中の面目あり毎年四月八日漬初度の献上

五月八日二度目の献上都合両度あり尤鮓屋より献上るは六田の其昔ハ七ヶ
村年々順番して當番の村に於て製し献上るは下市村に宅田屋何

某のつる鮓商人のつる鮓の調味に馴れしより此家小托して漬させ献上る事
有しより年々其加減の遠ぶる為し終る例年宅田屋に打任せ漬させ

夫より此家の名物として献上の時すまは平日も製して高きくも
然る小後世義経の本櫻として浄瑠璃の戯作此家此事と取組て作せしより諸國にその

名高く聞へ至人の名も更に更りて鮓屋の弥助に移り世に斯る例も又少くは
安騎野 下市善城両村の間にあり

秋野川

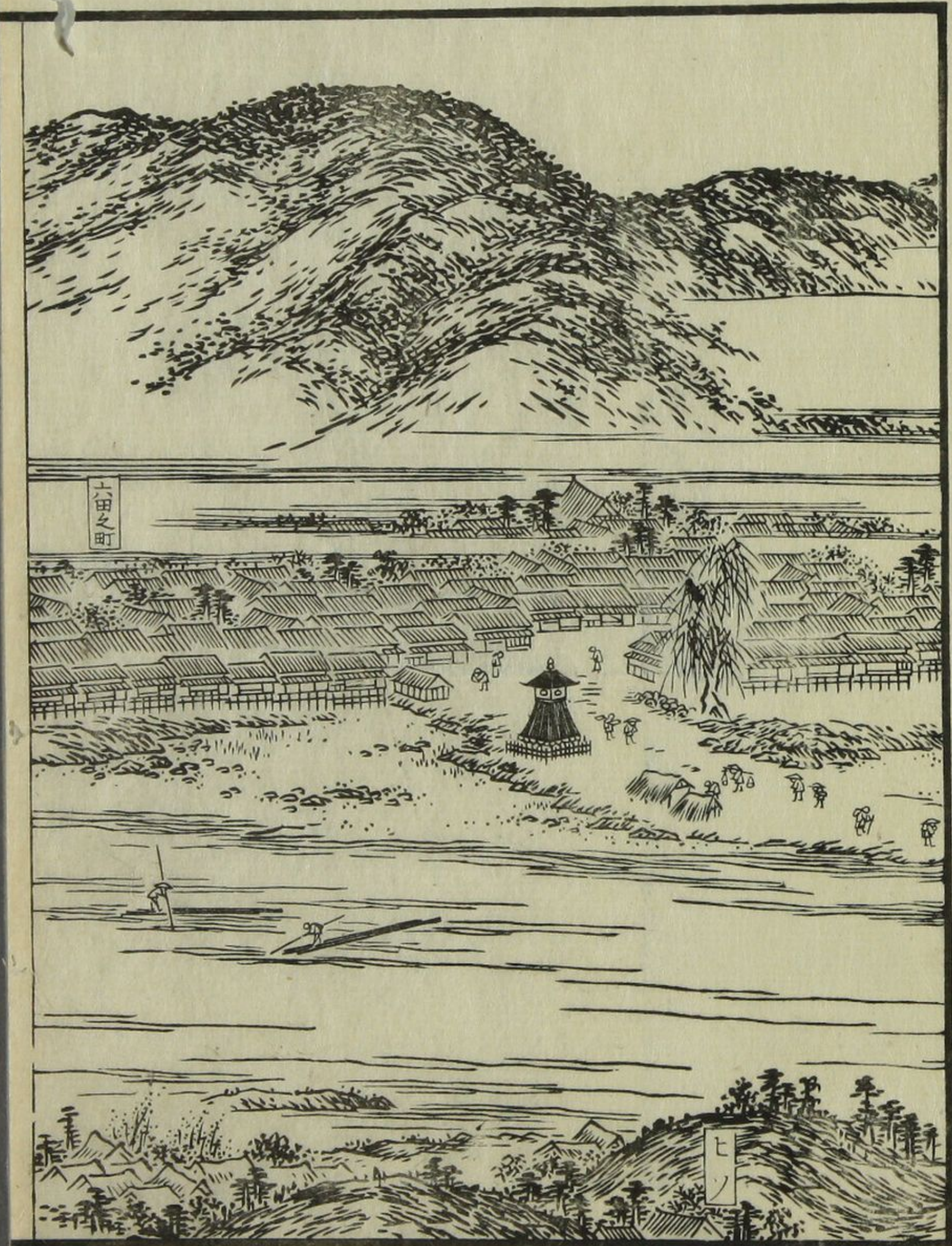
下市川より水源吉野山より出て
下市に到る則ち吉野川に

仙覚抄曰吉野山のたけのこは
萬葉 万葉の所より移るは人からむにいひの福ありやむしはとて

東野

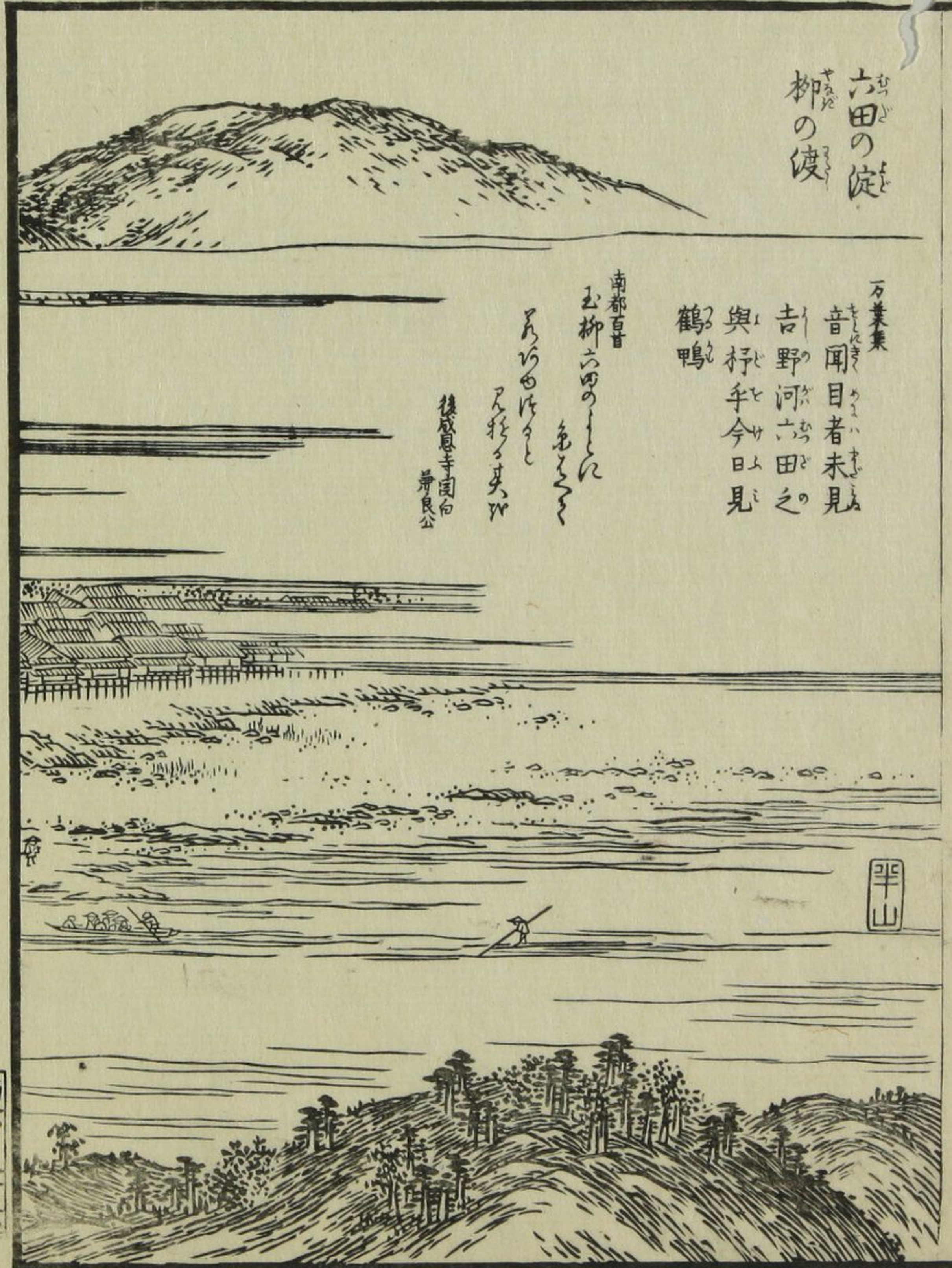
右に同と言塵集曰此東野ハ吉野の安騎の内あり
萬葉 薄塩草に吾妻野安騎野同名ありこの小野にもありト云

為伊 吾妻野にありハ平らの時をきし袖にありて堂にあり



六田之町

ヒソ



平山

六田の淀
柳の渡

万葉集
音聞目者未見
吉野河六田之
與村乎今日見
鶴鴨

南都言
玉柳六田の
又移る夫が
後感恩寺園白
并良公

西六三十一

吉野の里、味橋のつる男
 けりて吉野川、いづて魚梁とむ
 魚と取る木の枝、あられまはりて
 其の魚梁、留りしに、とれ取
 うづの忽ち、作て、兼た女とらる
 是則ち、仙女あり、終り、味橋と
 夫妻の、ちとらうと、は、老い
 死に、いづも、久し、住り
 とも、此、晋、方、葉、集、見、下、う

從駕吉野宮

高向諸足

在昔、釣魚、士方、今、風
 公、彈琴、与、仙、戲、投、江、將
 神通、拓、歌、後、寒、渚、霞、景
 飄、秋、風、誰、謂、姑、射、嶺、駐
 彈、望、仙、宮

右懷風藻

小五



